

ギリシアの言語と文化

法学部
平尾 節子



アクロポリスのエレクティオン神殿

ギリシアと言えば、まず、何をイメージしますか？ エーゲ海の青い空と紺碧の海。眩しい太陽の下、白亜の列柱を輝かせるパルテノン神殿やゼウス神殿などの壮大な古代遺跡の数々。いにしへの都市国家の栄光を今に伝えるアクロポリスの丘。ギリシア人と言えば、ソクラテスやアリストテレス、ゼウスやヘラクレスを思い浮かべる。美の女神アフロデイト、知恵の女神アテナなど、オリンポスの12神をめぐる遙か古代のギリシア神話の世界のロマンへの憧れがあるのだろうか。

2002年9月、私は、EU（ヨーロッパ連合）の言語教育政策に関する調査・研究の一環として、EU加盟国であるギリシアの教育省、アテネ大学を訪れた。初めてアテネ空港に降り立った時、いよいよヨーロッパ文明発祥の地への第一歩だと、胸をふくらませた。エアポートバスでシンタグマ（憲法）広場へ向かう途中、映像や写真でなじみのあるアクロポリスの丘がそびえ、町なかに神殿の姿なども目に入り、わくわくした。同時に、高層ビルの谷間を猛スピードで走る車の流れと人々の喧噪。実に活気あれる市内の様子に目をみはった。首都アテネは、ギリシア全人口の約3分の1、約320万人を超える大都会であり、政治・経済・文化・教育の中心地なのである。古代のロマンと現代の息吹きの二面性に接し、感動とともにギリシア研究への好奇心でいっぱいになった。

アクロポリスとは「高い丘上の都市」という意味で、古代には神殿が建てられた聖域、さらにポリス（都市国家）防衛の要塞として二重の役割を果たしていた。

古代アテネ建築物として修復されて残っているのは、パルテノン神殿、アテナ・ニケ神殿とエレクティオン神殿である。

エレクティオンは6人の少女像（カリヤティデス）を柱とした柱廊が張り出していて、美しい「乙女の露台」として名高い。

BC408年に完成し、19Cに復元されている。イオニア式円柱の少女像のオリジナルは、アクロポリス博物館に保管され、1本は大英博物館にある。

教育省のDr. Catherine Zouganeliが予約して下さったテイタニア・ホテルの部屋には美しい花束が届いており、アテネ大学のSofia Papaefthymiou-Lytra教授からも、歓迎のメッセージが届いていた。Dr. Joseph ChyshochosとDr. Ingrid Thompsonからは、直接、歓迎の電話をうけ、ギリシアの人々のWarm hospitalityに感激した。テイタニア・ホテルの屋上には、ルーフ・ガーデンがあり、オリーブの木が茂っている。その名も「オリーブ・ガーデン」というレストランで、スブラキ（白身の魚、羊、牛の肉を串刺しにして炭火でグリルしたもの）、フェタ（真っ白な山羊のチーズ）野菜とオリーブのサラダ、ムサカ（ナスと挽肉にベシャメルソースかけオープンで焼い

たもの)などギリシア料理をご馳走になったのも、楽しい思い出である。ギリシア教育省、アテネ大学を訪問した際には、ギリシアの言語教育改革に関する貴重な資料提供をいただいた。小・中・高校の教員とディスカッションをする機会にも恵まれ、ギリシアの語学教育の現状に接することができた。Sofia Papaefthymiou-Lytra 教授から、応用言語学、英語教授法に関する著書を、愛知大学図書館に寄贈いただき感謝している。

世界の中のギリシア語、ギリシア語の中の世界

現在のギリシア語人口は、国の内外合せて、1,800万人足らずで、それほど多いとは言えない。しかし、英語の単語の21%がギリシア語起源で、学術用語では、50%以上になると言われる。例えば、アルファベットという名称自体が、ギリシア語のアルファベットの「A(アルファ)」と「B(ベータ)」を組み合わせたものである。ギリシアでは、今日でも、「 Σ (シグマ)」や「 Θ (スイータ)」といった数学記号などで馴染みの24のアルファベットが使用されている。これは、紀元前9世紀頃、フェニキア文字をギリシア表記に借用して以来、現在に至るまで変化していない。日本語における外来語の例として「台風」 $\tau\upsilon\phi\omega\omicron\upsilon\mu$ (英語)「 $\tau\upsilon\phi\omega\omicron\upsilon\mu$ (ギリシア語)」がある。インド・ヨーロッパ語族内で共通の語源から生じた語彙もある。例えば、「母」を意味する「 $\mu\epsilon\tau\epsilon\rho$ (ギリシア語) = $mater$ (ラテン語) = $Mutter$ (ドイツ語) = $mother$ (英語)」である。

ギリシアの詩人オディッセアス・エリテイス (1911~1996) が、ノーベル文学賞受賞記念講演 (1979) で、「25世紀の長きにわたって、ただの1世紀たりともギリシア語で詩が書かれなかった時代はない」と述べたのは有名である。ギリシア人は、ギリシア語が、古代から中世を経て近代にまで継続したという事実を重要視している。

このように、ギリシア語は、ヨーロッパ世界のあらゆる言語の基礎となった「古代ギリシア語」と、現在日常的に使われている「デイモテイキ」

ギリシア語のアルファベット			
読み方 (現代語)	大文字 小文字		ラテン表記 (古代) (現代)
	アルファ	A	α
ブイータ	B	β	b v
ガンマ	Γ	γ	g g, y
デルタ	Δ	δ	d dh
エプシロン	E	ϵ	e e
ズイータ	Z	ζ	z z
イータ	H	η	e i
スイータ	Θ	θ	th th
イヨータ	I	ι	i i
カッパ	K	κ	k k
ラムダ	Λ	λ	l l

ミー	M	μ	m m
ニー	N	ν	n n
クスイー	Ξ	ξ	ks ks
オミクロン	O	\omicron	o o
ピー	Π	π	p p
ロー	P	ρ	r r
シグマ	Σ	σ	s s, z
タフ	T	τ	t t
イブシロン	Υ	υ	y i
フィー	Φ	ϕ	ph f
ヒー	X	χ	kh h
プスイ	Ψ	ψ	ps ps
オメガ	Ω	ω	o o

と呼ばれる「現代ギリシア語」の二つに分けられる。近年まで、現代ギリシア語も「カサレヴサ(書き言葉)」と「デイモテイキ(話し言葉)」という2本の言語体系状態であった。1976年の教育法によって、口語に基盤を置いた「デイモテイキ」が教育と行政の公式の言語として認められ、1本化された。

ギリシアの外国語教育

EU 統合および社会経済の変化に対応して、ギリシアでは教育の面における変革が進められている。教育の質の向上はギリシアの第1優先事項である。現代ギリシア語は、EU 市民の3~4%が使用する言語であり、ポルトガル語2.6%、デンマーク語2.4%に続く。このような状況の中、外国語教育の強化・充実が推進されている。1993年、教育大臣が、下級中等学校で英語のほかに第2外国語を導入することを提起、実施された。

現在、ギリシアの外国語教育は、小学校4年生(9歳)から英語が必修で、週3時間、年間270時間学習する。中学校(ギムナジウム)では、英語に加えて、第2外国語(フランス語、またはドイツ語)を必修科目として履修する。すなわち、EUの言語を2カ国語学習する。英語の授業時間数は、週2時間、年間180時間である。従って、義務教育の期間における英語の授業時間数は、合計、年間450時間である。高級中等学校(リケイア)日本の高校レベルでは、英語が必修であり、第2外国語として、ドイツ語とフランス語が必修である。

その他の EU の外国語からオランダ語、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ロシア語、アラビア語、トルコ語が選択履修できる。

評価は、学習到達目標が設定されており、各学校、学年終了時に Listening, Reading, Spoken Interaction, Spoken Production, Writing の 5 領域にわたって、各々、A1, A2, B1, B2, C1, C2 の 6 レベルに評価する。C2 が Native speakers のレベルである。

語学教育のクラス・サイズは平均15名。最多クラスが30名であるが、その場合は2グループに分けて指導する。30名を超えないという基準がある。

EU 教育プログラムへの参加

EU の言語政策の目的は、「EU の多様な言語は文化遺産である」という観点から、多言語・多文化・多民族の共生と発展である。現在 EU の加盟国は15か国であり、11の公用語を有している。「ヨーロッパ言語年2001」の目標は、Pluri-lingualism であり、Pluri-culturalism である。複数言語「1 + 2」すなわち「母語プラス EU の 2 か国語以上」の習得がギリシアにおいても推進されているのである。

「ソクラテス」(Socrates) : 総合的教育計画、
「リンガ」(Lingua) : 外国語教育計画に基づいて、小学校における「早期学習」から「生涯学習」にいたるまで、「1 + 2」の複数言語の学習が盛んである。「エラスムス」(Erasmus) 計画は、大学生・教員・研究者の相互交流推進計画であり、単位互換制・登録料免除のシステムのもと、マルチ・リンガルのヨーロッパ市民の育成を目指して実践されている。各国間の留学生を2010年には300万人にすることを目標とし、2004年200億ユーロの予算を計上している。

ギリシアの青年と、他の EU 諸国の若者との交流が増加し、「青年交流プログラム」の推進と、ヨーロッパ市場における雇用の機会に関する情報の組織的提供の拡大により、外国語学習へのモチベーションが高まっている。アテネ大学図書館で親しくなった学生は Target language の英語で論

文執筆中とのことであった。シンタグマ広場で教育省への道を尋ねた時も、街角での道案内も、英語であった。広場を前にしてそびえる国会議事堂は、近代ギリシアの初代国王、オット - の王宮として建てられたドリア式の大大理石の柱が印象深い建物である。南側前面には、無名戦士の墓がある。クリーム色の美しい外観を背景にカメラのシャッターを押してくれた青年の英語も、その笑顔とともにさわやかであった。

ギリシア神話での最高神ゼウスの祭礼時に開催されたオリンピア競技は、現在のオリンピック大会の源でもある。2004年8月、アテネで「古代オリンピア」が蘇り、世界の人々を迎えて再現される。1896年の「近代オリンピック」発祥の地への108年ぶりの「里帰り」である。その対応に向けても、今、アテネは外国語学習熱が加熱している。

古代ギリシア文明は、ヨーロッパ文明の基盤をなしてきた。現代ギリシア国家は、古代ギリシアの継承者として、ヨーロッパ統合のチャレンジに直面する。現代ギリシア語を EU の公用語の一つとして、外国の人々に学習を奨励し、また、古代ギリシア語を文化継承と発展のために学習する。古代ギリシア演劇では、現在もセリフに古代ギリシア語が使われることがある。日常使っていない言葉をギリシア人は理解できるのかと思われるが、今でも、古代ギリシア語は、学校教育において必修科目として、教えられているのである。ここに、ギリシア人の「古代ギリシア人の末裔としての我々」という意識がある。古代と現代との二つの視座から、立体的にギリシアが見えてくると感じたギリシア訪問であった。